



地域資源をまちづくりに活かす

産業観光によるまちづくり

浅野 健

観光といえば、東海地域では高山、下呂、伊勢志摩に代表されるように、岐阜県や三重県で積極的に取り組まれているのに対し、愛知県は工業都市のイメージが強く、これまでは観光に対するイメージはあまり強くなかった。しかし、愛知県でも一九九〇年代半ば頃から「産業観光」を柱として観光に対して取り組まれるようになった。この言葉が地域に浸透し、一部の地域では、産業集積を地域資源としてまちづくりに活かす取り組みが出てきている。



常滑のやきもの散歩道
海に浮かぶ中部国際空港が望める



半田にある旧カプトビールの赤煉瓦の建物。

産業観光とは

産業観光とは、名古屋商工会議所のホームページでは、「歴史的、文化的価値のある産業文化財（産業遺産、工場遺構、工場・工房、製品など）を観光資源として、人的交流をはかる、モノづくりの原点を訪ねる観光」と紹介されている。産業観光については、二〇〇一年十月に全国初の「産業観光サミットin愛知・名古屋」が開催され、「産業観光宣言」が採択されて以降、愛知県の観光の目玉として「産業観光」が徐々に浸透しつつあり、全国でも「産業観光」が語られるようになってきている。今年には中部国際空港の開港、日本国際博覧会（愛・地球博）の開催という二大プロジェクトの集大成の年で、



トヨタ自動車の工場見学後にもらえたトヨタ 2000GT のミニプラモデル



有松絞の見学(有松・鳴海絞会館にて)

東海地域の各地で、産業観光に関する数々の取り組みが行われる。東海地域は、トヨタ自動車の産業技術記念館、ノリタケの森をはじめとする企業の博物館、自治体が整備する産地の博物館だけでなく、工場見学が可能なところも多い。一般消費者と直結する大企業では、早くから工場見学に取り組んでいた印象がある。私が小学生の時の社会見学では、トヨタ自動車の元町工場と本社を見学し、名車トヨタ二〇〇〇GTのミニプラモデルをもらった記憶がある。約二十年経って数年前に再びトヨタ自動車の本社見学をした時に、その頃と同じおもちゃを再び手にした時には、感慨深いものがあった。

地域資源をまちづくりに活かして取り組んでいる事例

一般的にいわれている「産業観光」とは、工場見学や、企業や自治体の博物館、産業遺産という「点」を巡る観光のイメージが強い。だが、東海地域には、産地の製品や風景を地域資源としてまちづくりに活かす取り組み、つまり、産業観光を「面」で展開している事例が出てきている。常滑、瀬戸、美濃といった日本有数のやきもの産地での窯めぐりや観光ボランティアのもてなし、東海道沿いに今も残る有松・鳴海絞りで有名な有松の取り組み、名古屋駅近くにあるトヨタ自動車発祥の地の産業技術記念館やノリタケ本社に位置するノリタケの森及びその周辺の「ものづくり文化の道」、ミツカン本社がある博物館の里や国盛酒の文化館、旧カプトビールの赤煉瓦の建物を回遊する「半田蔵のまち」の取り組みなどである。

このうち、常滑、瀬戸、有松、ものづくり文化の道には、昨年の三月に、愛知県内在住の外国人の方々（英米系・中国・韓国）を案内する機会があった。観光ボランティアガイドや現地住民の方などに案内をお願いしたため、外国人の方々に知られていない一面を見ることができ、概ね高い評価を得た。一方で、観光面での取り組みがはじまったばかりの所が多く、飲食店・買い物ができる店・休憩施設

設などがまだ不足している、といった指摘が多く聞かれた。日本人の観光客を対象としたとしても、これらと同様の回答が得られると思われる。

産業観光によるまちづくりを推進するために、旅行者ニーズからいえば、温泉旅館などで温泉、カラオケ、おみやげなどありとあらゆるものがそろっていて、団体旅行に参加した時代から、家族や気のあった仲間と少人数でプランを立て、自分のペースでまちを楽しむ時代が変わってきている。産業観光によるまちづくりの取り組みは、このような近年の旅行者のニーズにマッチしていると思われる。

産業観光によるまちづくりを進めるためには、産地の商品開発、イベントの開催、観光ボランティアの育成、観光雑誌の活用やパンフレット・インターネットホームページ・携帯での情報発信、レンタサイクルによる回遊性の創出、飲食店や買い物施設の創出、トイレや休憩施設の設定、施設のバリアフリー化などの基本的なアイデアを持つとともに、これらの取り組みに関わる地域の人材の発掘と育成、観光客への簡単なアンケートなどによるニーズ把握も必要である。このような動きを地域で少しずつつくっていくことに取り組んでいきたいものである。

一朝一夕では出来ない、ものづくりの中核圏域

東海地域を代表する産業としてすぐに思い浮かぶのはトヨタ自動車系列企業に代表される自動車産業であるが、その他にも工業用マシン(ブラザー工業)、工作機械(オークマ、ヤマザキマザック)、洋食器(ノリタケ)、碓子(日本ガイシ)、ガスコンロ(リンナイ、パロマ)、衛生陶器・タイル(INAX)、電動工具(マキタ)、食酢(ミツカン)、ジュース(カゴメ、ポッカ)、コンタクトレンズ(メニコン)など、各分野で日本を代表する企業が集積している。また、瀬戸・常滑・美濃・萬古(四日市)という古くからのやきもの産業の集積、岐阜市から愛知県西部にかけてのアパレル・繊維産業の集積もある。その結果が、愛知県の26年間連続日本一の製造品出荷額等約34.5兆円(2002年工業統計)、名古屋港の日本一の貿易額約10兆2,500億円(2003年名古屋税関)、三河港の日本一の自動車の輸出額約2兆3,800億円と輸入額約3,200億円(2002年名古屋税関)などの数字に表れている。

このような産業集積は一朝一夕にしてできたのではなく、当地域の経済界が結集してつくった名古屋港や四日市港、東洋一といわれた中川運河(名古屋駅南から名古屋港にかけての運河)の整備、豊田佐吉の自動織機の発明と息子の喜一郎の自動車づくりへの挑戦をはじめとする各企業の創始者の努力などがあってこそだと思ふ。東海地域のものづくりの歴史に子どもの時から触れられるような場づくりも、これから必要になってくるであろう。